

燈下墨談

薩摩琉球兩談
曾槃著下

15
1501
2





墨談

下

琉球

唐山も隋代大業以来藩臣と爲り、歳貢の例有り
として琉球及び屬島は事ハ蓋シ我藩の史館ニ詳
録有り、また源君美の南島志有り、及び近古の冊
封使王揖、使槎録、徐葆光が中山傳信録、周煌の
琉球國志略等も又々々々々々々々々々々々々々々々
流傳をのこせり、其末に流求征代記を略載す

程順則

程氏と元録年間、海を踰り唐山に入學して、國
中の陳元補字昌其子位、ふる元十五年より、將

早稲田大学図書館
昭和 35.10.14 贈
藏 書

は帰らんとせし元補、詩を集て枕山樓詩集
を刻ま、枕山樓詩法何り別、跋を載し元
補と康熙中のくま、長崎へも来りて見え
し、須則字ハ寵文俗稱と古の藏親方とふ人
なり、蓋琉球よりくま、古今一人の碩學なりと
云

自了

自了中山人なり、其の姓民を譯し其れつねに啞
と沙法せし、余より平生ハその言語を道人
し、時何れも土藏北内より何れ、余をとり相傳せし

之より彫鑿は巧く瑪瑙及水晶等ハ花卉禽獸の
形を刻す、其より更に奇之共法ハ芭蕉根を刻て其
内ハ玉石の材を納め、其れ取りし、鑄刀ハ其意
ハ何れ、素より其れ彫成、其れ彫劇の梨棗を志し、
其れより其れ奇術なり、中山城外ハ高く筑し、
石埃何れあり、其れ日そのとよ、登て入日を眺、
い、く、く、く、人石埃の隅おのつら、崩れ、自了
も、と、か、く、陸、人、と、せ、し、其れ、山、石、の、を、と、り、
こ、飛、を、ま、其、其、の、月、く、く、く、く、く、
より自了ハ仙術何れ、其れ、陳元輔、その傳を

撰しくしいふ索覧世の書新志よれく
と眼今此説中山人仲渠り
よめり
仲渠と云ふは性
來して醫経を

琉球或は龍宮と稱は

龍宮説相傳しられみる所左の如し龍宮二字
はあて法并経にみえて方便姓名あるを水府
龍宮照く法をけり割の温嶠然屏照水見水
府龍宮といふもす譬倫の語もして海底
の性をしりありく李商隱が詩大海龍宮無
限地宋の五行志に常見水上紅光如日舟人不敢

近云此龍王宮也是み於温嶠よるのみ孫思邈
々得禁方于龍宮といふハ構て葉方を祀す
るの謂り皮日休る詩に彼神宮裡受齊歸注に
彼神謂龍宮卓氏漢林に龍宮佛寺也彦火と出見
尊龍宮遊行の章段ハ偽目に因る似たりこの他
も之如妄誕鬼性を極める所ハしりありく釋袋
中琉球神道記に琉球の異稱と明せり源君美純
説けるのみ

螺蚶器

螺蚶も即蚶嵌りりこの俗に青貝細工としり

琉球工人の製衣をくわくし且其翠碧珠寶色も潤美
 しくて唐山朝鮮珠ものもまきこれ等吾嘗て決明
 珠殼形りとあひつらばあつ日仲集り南産を
 親しくつら螺蚶の殼ハやくれをまき其
 よき色をえらみてつら形り丸やくい大形
 をも寶色形青翠ハ皆あ形りゆめありとく
 リの和名抄は錦貝をやくのまきらういしは
 ころさきつらく邪久とりひしハ今琉求形
 リ西史昆崙考詳之 くれ仲集り言よまき錦貝の名の
 ふきをききとる今船估載まると俗に朝

鮮榮螺と呼て寶色形ハ今琉求に毎用此は
 のをもくらく形りまきありあは能何よし出
 るやくわいのん少形を青珠とつらも錦貝は
 多よわ形ひさうのつらくまき蚌殼を嵌し
 あり通鑑陳記はくえり詳し予々昆崙考やく
 のまきらういの下はまきつ

琉求歌詠解

くのほくや 今このくれ 形を山まや形
 ころはなつほくまき形の 花のつゆき
 やたしあふわくまきいしに如常 ありぬ

春んさしめあらぬ縁てぬきゆてさうされを
春れいもそのゆき相合もさうさう水て
をぬのゆいので花のゆきをさうさう水て
つち神は白いもさうさう水て

歳貢者紀行の抄

荒垣筑登之とさうさうのあり頗好幸の僻河、歳
貢者、属て唐山、行程、其製造法を学ばず、
り、後藩府、役し、さうさうの銀朱、賽龍、
法、中、皆疎漏あり、成、其布、其、
堪、り、但、歳貢者、其、紀行、一紙を、
い、た、是、形、人、燈

下の用を資の、即左の如し

進貢使路程及加賞饗應進達書寫

- 一 安永七年戊戌進貢使者、
那覇出船十九日九ツ時東湧、
夜之四ツ時分竿塘、
子、隨い五虎門、
一 同安鎮、
事

一九月十二日為上着、
表文并進貢物、
由、諸衛門、
表文并進貢物、
由、諸衛門、

分供之者追宜以下候奉

一十月二日上系付福州出船六日水口着船八日
同前より陸地出立廿三日清湖参着廿五日同
前出船十一月四日杭州府着船翌日館へ休息
例之通諸衛門参官仕小事

一十一月八日杭州付出船十日蕪州府着船十一
日諸衛門参官仕小事

一同十二日同前出船揚州府通船廿日淮安府着
泊廿一日同前出船廿二日王家營上館去着當
下より陸地通之支於仕諸所驛へ被止宿十一

月良卿縣着十三日入城付先達而河口通奉差
遣置以付大使若老爺御外門上待合急月

皇帝様御機嫌之程承知仕以同人案内より入城即
日進上上信渡礼部衛門系上首尾能指上西花
門進會計司衛門公館へ就留り仕事

一同廿日退

皇帝様鮎魚一本拜領仕小事
鮎魚の類なり

品目詳録凡或も亦満州地方諸品也

一同廿一日

皇帝様瀛臺へ於て光駕の間五更時分西花門

而迎駕夫等供奉任事極多予特降北都大
 人奏者方准通商在伺公遣勿以為成以通商一
 跪任此時所系物暫予扣御前大臣和大人等
 以國王平安可有之或勅使等以付則平安無慮
 以候及
 殿宇之通商亦予瀛臺八系上候之法
 馳走之信付龍船八所先繫凍之上以供奉任陳
 張松弓矢任紐方信之取見之信付出所之砌
 西苑門道供奉任事
 一 同廿七日國王之物領物并私在末之近取候

之拍与信付外亦立左右通

賞國王

- 錦八匹 織金緞八匹 織金沙八匹 織金
- 羅八匹 紗十二匹 緞十八匹 羅十八匹

加賞

- 大緞一匹 湖筆四厘 福字箋一百方 硯
- 二方 大小筒箋四卷 徽墨四匣 雕漆茶
- 盤

賞正使副使二員

- 織金羅各三匹 徽各八匹 羅各五匹

絹各五匹 裏各二匹 布各一匹

賞土通事留邊通事共二名

緞各五匹 羅各五匹 絹各三匹

賞土通事一名送人及苗邊送共三十二名

絹各三匹 布各八匹

賞伴送官一員

彭緞袍一件

一同廿九日

皇帝樣大厝御參詣 出師之御接駕可任旨之信
付諸官人一同在勅事

一同晦日於保和殿宴上成下以件登城朝鮮國安
南國甸甸國使者一同于戊戌月又于信付在案
菓子以を下於信前以子一物以信盃頂戴諸藩
能取見之信付此事

附和以下末之追加賞物左之通了頂戴仕

加賞正使一員

金鞘小刀一把 回子緞五匹 回子紬五匹

回子布二匹

加賞副使一員

金鞘小刀一把 回子緞四匹 回子紬四匹

回子布二匹

加賞土通事苗邊通事都通事共三名

回子假各一匹 回子袖各二匹 回子布各

一匹

一同日重歲行例之通法菓子并木之寶色之盛合

滿州臺二臺上本下事

一正月元旦登城諸官人京一同躬扣九勒事

一同五日於紫光閣諸官人京四圍之使者宴上本

下以弓系上之仕官為多上御海內同取上

皇帝樣出御一跪石丹澤之上着座序片地走江

信付於月前日子つうり用孟頂戴仕諸藩能相
見与為成入御片付退出於布屋左之通指取拍
江信付以事

加賞正使一員

綿三匹 大假五匹 小假五匹 漳絨三匹

荷苞大小十 裏小卷假一匹 絹箋一卷

筆一匣 墨一匣

加賞副使一員

綿一匹 大假三匹 小假三匹 漳絨一匹

荷苞大小六 大卷假一匹 絹箋二卷 筆

二匣 墨二匣

一同十日祈穀壇上 乃成以幸以侍近駕十一日
所之初於午門此日同躬在勤小事

一同十二日圓明園上 幸侍於三門送駕法
寺圓明園之殿一指殿上扁十三日山高水
長陵上 幸上諸宮人上 四國之使者一同侍
生著

皇帝樣出所大撲躍烟火其上上 馳走上 侍
入在時分波波殿十四日又上 山高水長陵上 幸
上此上 同躬在侍侍上

一同十五日五更時分正大光明殿上 幸上諸宮人
流一同上 馳走上 侍侍海上 於侍前上
つ上 山高水長陵上 幸上侍侍波波殿
又上 八時侍山高水長陵上 幸上侍侍波波殿
相見上 侍侍侍侍上 十八日又上 幸上侍侍
樣上 侍侍侍侍上 幸上侍侍侍侍

一同十八日圓明園上 館一指越十九日山高水長陵上
幸上扣居

皇帝樣出所侍侍上 二間上 侍侍侍侍一跪仕勅
諭上 侍侍侍侍上 王安上 侍侍侍侍上

可取達令承知仕退去左表
應着諸藝能烟火
籠船中法通諸官入京一同
下小船慶
豐園近供奉仕此而子
而福の燈籠七外諸藝
相見法海上下京城
如公敏孫海外事
一同廿四日於礼部衛門常大人
由古伴少下馬
宴と来下同日於公敏上馬宴
と成下廿五日勅
書と来下事

一 二月四日起
月付大使吳老爺
由出換抄
三月三日清
九日湖亭州到着
廿二日同
取出船

江舖着船七日揚州府
淨船九日同
取船十一
日蘓州府着船
先例之通諸衛門
系官十四日蘓
州府出船十七日
杭州府着船
該衛門
系官廿一日同
取船廿八日清湖
着船是
陸地
四月二日浦城縣
到着五日同
取出立九日延平
府着是
水路通船廿七日
福州府
敏内下
着廿八日諸衛門
系官仕事

丑九月記上

喜名親雲上

琉人談十九條

寒山寺日張繼、夜泊詩の自書を彫りて大碑

阿の筆勢勁整実子希世の寶之さるを寺依りて
一く掘墓を禁は憾へ一其子鳥啼鳥啼の二説阿
りらの碑子鳥啼は作るといひるもさるは
一

福州石鼓山純純頂子朱文の法墨痕丸天海清純
四大字を彫りて人皆掘墓の事を謀れと其大掘
すまよひぬると云

鼓山純道禪師ハ大徳の修業してつひに虎を
養ふべくその側子馴らると云福州ハ虎おほ
とて禪師服しとて衣の裁端をあらたらんよ

と虎害をぬきんとし

槃おほしは福州ハ虎おほしといふ説疑ふは

卓琮といふ人ハ福州純道といふ書を結せり琮
人おほしは此人純書を学ばるといひ

福建の田中より堀出せり蠟石を春巖石と云
漢人も春といふ字を名に付るといふ春ハ祭勅
注意あれハぬると云

此説いふより尚後考をくは備へん

金山寺ハ揚子湖の島中にある寺ぬりその寺子

傳徒ハ常ニ千人付クモツ、寓居セリ、玩人ハ
張未金ニ僑居セシム、僑居ノ壁ハ皆石壁ニテ歷
代ノ名家姓名ヲ鑄刻シ、其ノ好む所ニ送ヒ
テ撮摹シテ與ヒリ、其撮法ハ皆烏金撮ト
云

墨ノ試法ハ諸墨ヲ磨テ試墨石ニ着テ日乾シ乾
定リテ日光ノ下ニ盪水ヲ注テ其ノ試墨石ヲ没
スルモ好墨ハ光彩ヲ發スリ

徐葆光冊使シテ時ニ久矣、村人ノ書ヲ見テ
皆無人ノ墨痕ヲ見テ筆勢凡格ニみヤレト我物

ニ取ラサレモ筆力良ニ取リト云

中山人取テ日本ノ書體ヲ好ミ和製ノ筆ヲ
用フルト京師ノ便ニテ唐山ノ便ニテ取ラレト
和製ノ筆ヲ福州ヘ取リテ取ラレト取ラレト
取ラレト即小文筆水筆是之其ノ筆匠ハ陳大
興蔣瑞元鄭瑞元等アリ、此ニ極ノ筆長崎ヘ携ヘ
テ取ラレト所以是取リ

福州ニ奇雲ト云傳リテ、其ヲ寓居シ書
画ヲ能セシ、其時ニ總官ナリ使モテ其画ヲ見
ルルニ奇雲ハ官人ノ爲ニ書画ヲ學ビ

る傳ありたるとて其のつらさくつらさぬその
画蘭竹は巧之され琉球はありと云
殷元良字仲松俗名と吐^サ間^カ味^コ親^バ電^イ上^キとつら人画
を好みつらつらも画かけり孫億は等し福州に
て孫億法画ハ燈籠の画は相傳一人故て貴とせ
に福州ありて謝天祐といふ人の画を賞せ琉
人もありてその人の名あり

沈香青楠の法法をき、たれを我よりあし、
小京歳首之式帝王ハ元旦日先満式とて鳥獸を
全體乃まゝ、或も煮てこれ供膳に奉るま

うこれに諸貝勒及諸臣は饗に次は漢式とて今
の中並の式にて飲食は満式を元是大祖満州乃
人形ハ故昔を存する

全體乃禽獸を炙り并ふらハ劉熙釋名云凡魚
首尾全炙者曰鮑炙今唐山菜單ハ全鴨鮑と志
るし、うも即全體乃炙り炙り式ハ煮とてを
いふ

満式ハ食鹽を器四ハ盛りて附饌に傳へ
つ宴終るに諸貝勒をけり賜りて歸ると不
是ハ際海をなると食鹽を貴む事以海の

人と安んずるなりと云ふ此後ハ後子云ふれ也
く子附く言

聖廟福州城中三所あり一は皇帝より祭祀の
廟あり聖像ハ如く唯木牌を奉り外二所を福
州よりの祭ありミンセンハウクレセンと云ふ所あり
今より其之圍一町四方斗あり廟殿も瓦葺あり四
方柱あり屏之門内子橋あり即洋水之左右子七十
子の廟及び歴代諸賢の廟を建より夫より十二
三間の堂あり即正中子聖像を安れ左右子思子
曾子の像あり前子十哲の像を二行に斑列れ七

十子及歴代諸賢ハ皆木牌に官名を標する其
堂中常に鎖すも如く日ハ童兒游戲する所之
童兒聖像の腹部を撫てまゝ其身の腹部を撫る
之我腹中も聖人ハ似たり人事を欲せしと云

孔廟の事も孔魯聖典に詳に云ふなり
福城ハ圍三里あり列肆も中子有り城外ハ園
あり繁昌の地之琉球館も城あり城中心子本
丸と云ふ所子將軍と云ふ所の居位あり
別子惣都督布政司の居所有り將軍惣都督布政
司の三宮も福州商人の尊敬する所甚く重し將

軍往來の時も輿に乗り送者六七十人けり
市井通り時も町家の主人廓を開きて戸印を
いりて禮状を盡せし行列の次第はさうして覺
へられしを銅鑼をお鳴し威嚴に更し甚し小京
へ帰朝時輿に乗送者八人并之小京少輿
に乗人ハ三公以上の人けり之
も震垣識略所より詳録し之れを異所より
とす

福州の事ハ福州府志より詳明

小京饗應琉人此僑居ハ鴻盧館とて城中より

又四夷館とて廓外より朝鮮占城安南共他諸
列一同に居先ハ小京廿一箇ハ城内に居跡あり
小京廿一箇ハ外館に居諸列入貢せる時一同に
饗應あり飲食甚し錯雜あり皆より一つのみと
り食ふ琉人も布袋をもちて食物をもち持
帰りし福州あり琉人饗應の節も誠し嚴重に
る様あり官人出迎して元皇帝に拜をなせしと
て小京乃方より向て三拜しその後飲膳は着き固
より煩席をれしつ若食物残りあるハ跡より僑
居に贈られし之れ時とるまよのりて性甚に

右北京の官人古席あれと福州とちひして
甚亂雜之

凡驛路ハ福州より北京までの宿、大概一般
の餐食あり、旅人の使副使を飯并奥二鉢吸
拍一鉢漬物一鉢酒ハ量は随ふ之、副二使一臺
之餘も四人一臺あり、奥一鉢吸拍漬物各一鉢之
惣て村長の遇殊に厚し

北京登城諸侯ハ奉丸とちえゆる圍のちちち
供奉の者とも烟草を禁むす、皆ハ烟草の粉を
かきつ、貯へ鼻中より吸入し慰む

進士中國諸府縣のうちハ六郷あり、毎年郷より
學寮を設けて入学せしむ、凡一郷三百人の諸生
を充て、三年よりひとたび省の國史監へ出、監よ
り詩文賦の題各一篇を出、此時三等を進め、
その三百人を選び、諸省より、是を北京の翰
林院へ出、優三等の題を出、試業せしむ、其
中及第の者三百人あり、其中をまず七十人を選
挙し、その一を狀え、その二を探花と號し、其
三を榜眼と號し、その餘も翰林院に入、諸省の國
史監の闕ある時ハそれの中より監に充てらる

云 此一條も清會典の説とも異なり
 と偶淡形れ、
 寛政丙辰の春中山人江戸へ來聘乃時子竹芝純
 郎小可其片の由不唐山小入交せしと二人可鄭
 章觀蔡邦錦とりふ 老る 臣赤崎貞幹小命
 二人小度山路程多し進交止賜給等終事を
 問ふしむ貞幹 此れを存記し一書となし
 琉客談記名つく共事略る詳あり今既少人
 間小流傳すあると云ふ

福有
 山河千
 景全農
 湖の如
 行絶を
 如し

酒席餽饌大畧

古昔餽饌貴乎八珍如鮑肝鳳髓狸唇豹胎子之

類蓋惟美其名而實無真正八珍食味也今之官
 長等人酒席所用餽饌惟山珍水味而已現今酒
 席排設食官長尊貴上等酒席也

- 一 客位設桌子南對南而坐
- 一 陪賓客位設桌子東對西而坐
- 一 主位設桌子西對東而坐
- 一 桌上正中香几一隻上擺香炉一坐香盒一個筋
瓶一隻兩旁用栴屏一對燭臺一對桌用桌幃倚
用靠背坐褥脚踏鋪設紅氈
- 一 酒席先擺桌子值席人等將杯筋小碟等擺列桌

此の條に清會典の説と異なり
 と偶談形に坊々に
 那瀾のみならず舟帆して福有
 陸盛京の宮殿よりたゞ海陸山河千
 里より舟車流覽のうち千状萬恐勝地景全農
 夕目よみつる僅琉亦陸放翁范石湖の如
 き人ありし入蜀記吳川流より行紀を
 著しへきよいまの如く全録を以て概し
 ね尋てらるる人

酒席餽饌大畧

古昔餽饌貴乎八珍如鮑肝鳳髓狸唇豹胎子之

- 類蓋惟美其名而實無真正八珍食味也今之官
- 長等人酒席所用餽饌惟山珍水味而已現今酒
- 席排設食官長尊貴上等酒席也
- 一 客位設桌子南對南而坐
- 一 陪賓客位設桌子東對西而坐
- 一 主位設桌子西對東而坐
- 一 桌上正中香几一隻上擺香炉一坐香盒一個筋
- 瓶一隻兩旁用插屏一對燭臺一對桌用桌幃倚
- 用靠背坐褥脚踏鋪設紅氈
- 一 酒席先擺桌子值席人等將杯筋小碟等擺列桌

子上先酌酒其值席人等跪坐聽候餽饌等凡三
十六品

十六碗每碗用一味

熊掌 用蝦羹酒醬
鹿尾 與熊同

燕窩 用雞火煨者汁加
魚翅 與燕窩同

海參 用生煨
羔羊 用些蒜頭煮調

猪蹄 與羔羊同
野鷄 起油鍋用酒醬油

鱔魚 用酒煨
鹿筋 用汁調退

鷄 係用酒鹽煮如

以上食餚之間飲酒

四點心

饅頭

羊糕 用麩糖拌蒸熟

隨上鮮湯 傾放蓋碗內擺出
雪粉團 用白糖為團

以上菜畢然後上飯宴罷更換坐所另設十六

盃又擺杯筋飲酒

十六盃

葷食四品

火腿切片 鹿肉切塊 兔脯切糸 蝦子養出

蝦子攤取

乾果四品

杏仁 松子 瓜子 落花生

糖果四品

風西 青梅 玫瑰糖 將花煮用 佛手柑 將山查子搗
糖作 糕

鮮果四品

時鮮果即如桃李等類摠用

以上酒食畢隨上清茶

大几上席飲酒中叫擾童歌唱用絲竹吹彈半席
放賞用紅封袋銀約一兩上寫司厨人司茶值席

斟酒托盤人等又賞優童寫大戲付之

中等酒席

一桌擺兩旁對坐客坐于左主坐于右

一不用香几插屏等物

一桌上先擺杯筋飲酒

餚饌等九二十四樣十碗

燕窩 榆肉 竿乾 鷄皮 此酒調用 全鴨

蓮肉 木耳 此酒一梳用醬 魚翅 魚圓 猪腰

大肉片 蝦煮汁調加蔥 鹿肉 肉圓 此魚翅一梳法

以上食餚之間飲酒

一點心

肉餚饅頭

猪肉油切拌糖

隨上鮮湯

湯與上等

海參

蝦圓

此一挽用雞

羊肉

小藥

此一挽用

鮑魚

肉片

此一挽用油起

鍋

後醬

鯽魚

香草

蝦圓

法煎

雞

此一挽與鮮魚

一點心

百菓餚粉團

將糖胡桃瓜子橙子

隨上清茶用飯

以上食畢另設酒席約十二盃照上等酒席仿

佛丈凡中等酒席隨便精收略拳行酒通用平

等酒席

即下等也

一坐位隨便不用擺設

一桌上只擺杯筋飲酒

餚饌等凡八樣七挽

魚翅

豬蹄

海參

羊肉

魚鷄

鮑魚

各調

與中等酒席仿佛

食餚之間飲酒

饅頭

一點心

以上食畢上茶用飯

右中下酒席餽饌係大畧但各地海陸魚菜之產不同更者時換換鮮食用之

右一紙中山人某子元子行是今西清氏卓子饌式形近來斯方少行小之略

式形

瓷器画燒法藥料

藍色應伍件 洋青 三錢二分 鳳砂 二錢五分
 流光 三錢 油粉 三錢五分 硝 二錢五分
 紫色應七件 碗青 二錢 脂 二分 骨丹 一錢五分

油粉 三錢 鳳砂 八分 流光 二錢 硝 二錢

錄色應伍件 宗錄 七分 流光 四錢 油粉 四錢

鳳砂 一錢二分 硝 二錢六分

白色應四件 流光 六錢 油粉 七錢二分 鳳砂 一錢

硝 二錢 又方 流光 六錢 粉 二錢二分 五厘 硝 二錢

鳳砂 二錢五分

黃色 骨丹 一錢五分 流光 一錢八分 油粉 四錢 鳳

砂 一錢八分 硝 二錢 又方 黃紅 八分 丹 一錢五分

粉 四錢 硝 二錢 鳳砂 一錢五分 流光 一錢五分

紫色 碗青 二錢二分 丹 一錢五分 硝 一錢五分

鳳砂 一錢 八分
 流光 二錢
 脂米 二分 又 三分 七厘
 油粉 三錢
 録色 銅録 七分
 鳳砂 一錢 三分
 硝 二錢 六分
 粉 四錢
 流光 四錢

右一紙中山學士鄭某すゝえゝり ○梅子流
 光ハ火消あり油粉を糯米粥り或ハ糯米
 糝焼石すすゝもの之硝も硝子粥り脂米ハ赤
 米粥り骨丹もへんカラ粥り宗録ハ石緑粥り緑
 と録子作るもとの名かくせゝと荒垣筑登
 之とゝり

琉求征伐記畧

琉求征伐記曰琉球國ハ清家九代住大守島津陸
 奥古忠圓公所代義教將軍ハの所舍牙大覚寺門
 跡大僧正成昭陰謀竊取せりハは將軍命子由
 々彼僧正を日州掃向ありを討し忠賞とす永
 代所おれ多てより年々歳貢仕来し所子文明
 年間より太中公所代まゝ諸所の兵乱は恐れり
 歳貢怠りハ在中細言家久公より時の將軍家子
 御披露可くハは家康公所詳容を文て琉球ハ
 歳貢は多しハ志布志大慈寺の龍雲和尚をき

され其旨を琉球王に諭されし事も敢て其命に
不従有訛雲彼國の地圖を觀察し且國王の信
ける波上辨賊天を隅州國名日秀上人の作なり
るるを取まりて守公へ其旨を申上りし依之平
田右衛門左衛門坊宗橋山権左衛門久高をある所
とと訛雲和尚指導あり山川に任人罷某を祀主
とと七海郡司と案日とと其勢頗合三千餘人慶
長十四年己酉三月琉球國へと押渡しける先共
海峽島の島々を攻りし一戦もなれ降参志
けれ、再い大船より船を出して夜半斗し琉球

玉江小口運天の永濱に着船は是南表に那覇濱
にも要害を築き用心をくくとのありなり案の
如く湊に小の城郭を構へ軍兵を築き海中より
乱機強索を張りて付掛しし、必ひしうぬ運天
永濱より攻入せし王城は押参一日一夜息をも
つかれ攻りし、あつと國王を始三司官以下忽
ち降人と取りて出さるを尚寧王を擒トクし薩
州中列海り界に於て尚寧王を召列將軍家に御披
露あり志ある家康公秀忠公よりも御感状を下
し賜り給永代御家之御領分とは賜されけり、

しき安後よりを何より辨を待たず知る
これども唐人の事知らず安謬あり多かれも心
地へき多く清三朝事畧云清世祖順治十年閏六
月琉球王中山王世子尚質遣使表貢方物兼テ徴ニ故
明勅印
十一年秋七月遣官冊封琉球王中山王世子尚質
為中山王案し尚質も尚寧も曾孫なり是琉球清
よ京市の始とん是より中山王襲封あり清使の
琉球よ来り定式とん或去琉球歳は西土一通
以高し其利を以て島民純資とぬぬるより
の地より採掘するものも布帛玩好純物よとん銀

銭の貸も清人よ取られ去られぬ事限あり銀
銭を以て年々その他のも取られしと上り
湧物も産物ありとも後には何れも産する
きし臨時純冊封使ぬぬるも琉球の
賞弊ありたれもきりぬるも薩藩に助を以て
まれわくも此償ふも後より多りて是も如何
でもも是らぬの形も多き其時より西土純金
銀借しおほれもやも受合ふもも是く
は美よのみありぬるも多きりぬるも是
利の利を計るのよ意何れ後の憂を慮るは後

の憂をいふんとして形に及ぶる○榮梅子尚寧も舜
 天王より丹二十四代子當り字も思徳金尚圓乃
 孫月浦の孫形尚永子世より形一故子國人こ
 れを立り王も天正年乃嗣封在位三十二年子
 して薨に子弟形一是時一 後水尾天皇元和六
 年形一

琉球屬島の目次

- 口高島 ウチノタケ 津毛野島 ツモノ 濱島 ハマ 邊浅島 ヘノアサ 宮城島 ミヤギ
- 池島 イケ 郡島 コホリ 屋川島 ヤカハ 瀬底島 セソコ 伊江島 イヱ 伊瀨 イゼ
- 名島 ナ 吉平屋島 ヨヒアヤ 鳥島 トリ 栗國島 アカクニ 戸無島 トナキ 蟻 アリ

- 間島 マ 球美島 クシメ 以上十七島 古中山 コナカ 宮古島 ミヤコ 池間 イケマ
 - 島 シマ 未間島 ミマ 之地今云本琉球 檜間島 ヒマ 水毎島 ミツノ 下 シタ
 - 地島 チ 石垣島 イシガキ 武富島 タケトモ 黒島 クロ 極間島 キョクマ 小濱 コハマ
 - 島 シマ 鳩間島 トビマ 新城島 アラシマ 米國島 コメクニ 以上十六島 古山 コヤマ
 - 海見島 ウミミ 懸間島 カケルマ 浮野島 ウケノ 夜島 ヨ 鬼界島 キカイ 度 タ
 - 感島 カン 沖永良部島 ウチノナガシマ 與路島 ヨロ 以上八島 古山北之 コヤマキタノ
- 右諸島洋記原君美南島志及ハ藩志より之
 一就之

冊封使取記琉球品物并土名
 清純冊封使徐葆光、中山傳信錄周煌、琉求國

志略に擧ぐる琉産動植物の名ハ其土名を唐音に
てたり也一も何れも耳に馴きを琉人の質問
して左方より云ふ

松露松花地に墜て生ずる石は俗名松露といふ
黄白二種あり屈大均廣東新語にこれを地質
と云

辣蕎今斯に云ラツキヨあり即水晶葱仲景方は言
薤白をいふも形似ハ昔に信せられたる周志
に蔬菜部に出し樹生と志す一たるハ蓋し
竹笋の誤也

薊この草を治て蓆に編しを土名リウヒンと

云按て遊仙窟に龍鬚筵有り其土名けり

に据依に按て薊も清人の俗名なり

原是附子につきたる側子の是ハ閩通志に

取云蕒あり鹹蕒淡蕒二種有り琉球にも

鹹淡二種あり詳に予々水草識に詳録に按る

に蕒も予々閩中の方言あり再雅釋草に

蕒も赤菟とみえり

砂仁草土名砂仁編砂仁といふは是良薑山薑

に属あり蕒の形に似るは砂仁の形に似る

形

觀音蘭繪録に觀音作と作と土名千年草と仙
人蕉揚方里減齋集に南海集に引いて鐵樹
とありまゝに廣東新語に朱蕉亦名朱竹とあり
ゆの是形と予々橘黃圃記卷十四に考證を載
しり

烏木毒唐音ヲモト和名ヲモトの名ハ原是丹波長
平乃勅號記藜蘆の注にみえりやと藜蘆も
今云ラモトの事ともありた長平注にハ今のヲ
モトをききしふつ詳形は清人の俗呼にモ

トを屋周とりふとりり吳繼志言

一葉にふつふとつバ即石葺形

聚八仙これ唐宋の際に賞玩する聚八仙ともあ

らぬ萱草の一種にふつふ琉球にサウ之即紅

萱其花紅艶を慕ふもよ更に大形

野牡丹土名に此種今にふつふ或も云瑞聖花此

説非也廣群芳譜に古平瑞聖花を載に其形狀

更に異あり

野蘭土名に是旋覆花の屬

禪菊土名にこれ俗に云紅黃草の最大形とゆの

形り今訛轉して鳳皇草と云

雷山花琉人しらぬ

山蘇花一名猿筵土名サルムシロ山蘇も言ハサル純

音便形も厚くうま云々ニワタリ 歪頭菜と葉乃
同名異物

うま石葦子似て一窠數十葉叢生其花も

しらと稀く

吉姑羅土名キクロウキフクログキうま云サボテン

霸王樹之徐録純說然、周志却て誤

天竺子一名南天竺土名之これ南天燭

庭梅土名ニハウメ之周志、略以郁李ト云ものも

琉産更々大あれハか、あ、う、う、形らん

福木土名フクギうまこれあうまをしらぬ

呀喇菩土名ヤラフサ、ヤナボらうま有之をしらぬ

櫃土名之訓マハシと云按うま再雅釋木子栲ハ山

櫛蓋一色之

黒木一名烏木土名クログキ君櫛此材之

黄木前よりハシの材之

赤木一名紅木土名アカキ花櫛乃材之蓋、外方

よりまうもの形も厚く

福満木土名フクマンキま、ホマシ金石榴の属

古巴梯斯土名クワテスうま、うま、うま

右納土名イフナキ、ニナキ、イウナキ、ヨナキ

シヨ云ハコホウ金木蘭清估の俗呼なり

地分木土名イシコキ、うま有、を志らる

月橋是金橋の至小なるもの之近來致之一名京

橋

梯沽土名テコキ、デク刺桐の属

志達慈姑土名シラッコ、アゴヂキ斯有、を

を志らる

萩らう云ハギ周定王放荒本草、胡枝花一名隨軍

茶百菊集譜、觀音菊一名天竺花是之按、再

雅、蘭萩、陸璣云今所謂萩蒿者也和名抄

鹿鳴草和名ハキ、ハキ即天竺花之萩、ハキ

と云、これ同名異物之尚詳、草水考、

辨、

喫カ土名キリ、うま有、を志らる、桐、

ハキ

阿咀呢土名アタン、廣東新語、載鳳梨之周志蓋

引之、其子を清估、水生毫、云薩摩、

てこれを木アタンと云、盧會を草アタンと云、

木本を木盧會とりひ草本を草盧會とりひ
ハ甚誤之木本此ものも今盧會より詳
橘黄岡記卷六草栴二十種改證中子辨

古哈魯土名コハルらよりふ_レヤコヒスヒ_レヤマシヤ
ウヒン翡翠之魚物の一様

麻石土名マシコら_レのマシコ之或ハ云鶯の_レ聲を
出さ_レるもの之薩摩方言デツチと云此説いふ
か

伊石求子土名イシキス鶯之

烏鳳一名王母鳥四月未琉ノ志_レ凡成天桂海

志_レ載_レる_レ異_レ形_レなり

客蕊土名イヨウスヒ_レら_レ子云イカルカ桑鷹之

石求讀土名モトス_レら_レ子メシロの屬

毛魚土名シヨク小魚小指頭の如_レし_レ扁七月最

盛之酒魚と_レ解_レて遠_レく鮓

佳蘇魚周志_レ馬又魚脊爲之_レ馬又魚_レ是堅_レカッ

魚_レ鍾_レ之徐録_レ黒_レ鰻_レと_レ解_レ之_レ黒_レ鰻_レ周志_レ其_レ誤

を質

呀低媽菩土名ヤテマブ_レら_レ子_レクモカヒ徐録及臺鷹

府志に載する所の壁虎魚是之

一石眉巴魚蓋琵琶魚也未詳

阿鰻姑魚琉人志に

他麻魚琉人志に

勿詩眉巴魚これ等琵琶魚形に

阿甲拏魚琉人志に

一拉不知魚琉人志に

海馬上名サン周志に馬頭魚身得者先以進國王

是海錯珠

海蛇土名エラブウナギ橘黄閑記卷二に詳録に

菩喇喀土名ホラカ是法螺之即板尾螺

緑螺土名ヤクカヒ和名鈔に錦貝和名ヤクノマタラカヒ

とりのものは之予々国史昆虫考及清のありき

に詳録に鈿螺と形のもの

寄生螺に云ヤトカリ寄居虫之

文具琉人志に其状も白色小螺紅線二條あり

へり相摸三浦に方言不審介品に玉簾と名

せり

喀達哈土名ケタカに云金剛介に九輪介徐

録に枕螺慎懋宮並考に刺螺とりの是之

以上諸名の外大氏辨に序されし
も可ん

